高齢者とアートのしあわせな出会いを目指して

～2014年度　高齢者施設への芸術家派遣事業＆セミナー開催の記録～

2015年3月

編集・発行：**アートサポートふくおか**
〒812-0884　福岡市博多区寿町3-5-22-806
TEL090-7462-1657　FAX092-591-6517
office@as-fuk.com　http://www.as-fuk.com
助　　成：日本財団 THE NIPPON FOUNDATION
（公財）福岡文化財団

高齢者とアートのしあわせな出会いを目指して

2014年度　高齢者施設への芸術家派遣事業＆セミナー開催の記録

アートサポートふくおか

高齢者とアートのしあわせな出会いを目指して

高齢者福祉施設にアーティストが出向き、お年寄りを対象に美術や演劇、音楽、ダンスなどのワークショップ(参加・体験型活動)を行う取り組みが、少しずつ広がりつつあります。その現場では、アートが趣味や娯楽の域を超えて高齢者の潜在能力を引き出し、高齢者がいつもは見られない表情を見せる、介護する人々との関係性を変えるなど、さまざまなことが起こっているようです。高齢者がひとりの人間としての尊厳や輝きを持ち続ける、そんな生き方ができる世の中をアートでつくることができるかもしれません。

アートサポートふくおかでは、2013 年から高齢者施設への芸術家派遣事業を開始し、すべての人が人生の最後のステージまでイキイキと生き抜くことができる社会を、アートを通じて創出することにチャレンジしています。2014 年度は、福岡県内の 6 施設に対し 5 団体(人)のアーティストを派遣し、10 数回の芸術ワークショップを実施しました。

アーティストのみなさんには、高齢者施設での活動プログラムを新たに開発するなど、意欲的にご参加いただきました。

受け入れてくださった施設の方々からは、「利用者(高齢者)の方の日ごろは見られないような笑顔を見ることができた」「意外な一面を発見した」「施設スタッフ同士、利用者とスタッフのこれまでになかったふれあいの場になった」などのご感想をいただいています。

現場に立ち会うコーディネーターとしては、認知症やさまざまな状況を抱えておられる高齢者の方々が、たとえひと時でも笑顔のあふれる温かな場で過ごされる様子を拝見するのが何よりの喜びです。

2015 年 2 月 11 日(水祝)には活動報告と今後の展開を考えるため「高齢者とアートのしあわせな出会いセミナー」を開催。福祉関係者、芸術文化関係者などお集まりいただいた方々に、高齢者施設での芸術活動に関する現状と課題を共有していただきました。

この冊子は、2014 年度に実施した活動の記録として作成したものです。記録を残すことが今後の活動に新たな展開をもたらす可能性に期待しています。

ぜひご一読いただき、このような活動に賛同していただければ幸いです。

2015 年 3 月

アートサポートふくおか
代表　古賀　弥生

＊ 2014 年度の活動には(公財)日本財団、(公財)福岡文化財団の助成をいただいています。

「アートサポートふくおか」とは？

誰もが身近なところで芸術文化を楽しめる環境整備を行う民間非営利組織。
学校や地域、施設等が実施する芸術ワークショップなどをお手伝いします。
そのほか文化政策に関するセミナーの開催や調査・研究なども行います。

〒 812-0884　福岡市博多区寿町 3-5-22-806
TEL090-7462-1657　FAX092-591-6517
E-mail　office@as-fuk.com　http://www.as-fuk.com

アートサポートふくおか　高齢者施設への芸術家派遣事業

アートサポートふくおかでは美術、演劇、音楽、ダンスなど、さまざまジャンルの芸術家を高齢者施設に派遣しています。2014 年度の活動の様子をご紹介します。
※ここにご紹介しているのは活動の一部の例です。ご要望に応じてさまざまなメニューを提供します。

GAHO-ORI の箸袋 制作　　講師：雅 GAHO 峰

カラフルな色紙から好きな色を組み合わせ、はさみで切って織物の柄のような切り紙細工の箸袋をつくります。「切る・折る・編む」のシンプルな作業の繰り返しで、実用的でおしゃれな作品に。実際に食卓で使ったり、プレゼントにしたり、生活に彩りが生まれます。箸袋のほか、しおりやランプシェードにも。

紙染めの小物入れ 制作　　講師：NPO 法人アートもん

木製の箱（百円ショップなどで購入できます）に障子紙を絵の具で染めたものを貼り、筆などで絵を描いて仕上げます。折った障子紙を絵の具に浸し、広げてみると意外な模様にびっくり。世界にひとつだけの私の作品が完成！
想像力と創造力が広がる作品づくりです。

ダンス　　講師：マニシア

イスに座ったままの姿勢から無理なく身体を動かし始めます。お隣の方や施設職員の方ともふれあいながら、心と身体がだんだん自由に。気持ちが高まると立ち上がって踊り出す方もおられるほど。安全に配慮しながら「やりたい」気持ちを支えます。普段は見られないような笑顔、華やいだ表情があふれるステキな時間が流れます。

踊りながらマニシアさん（ピンクのシャツ）にダンスホールの思い出を語り始める方も！

高齢者施設での芸術体験ワークショップ事例紹介【音楽編】

実施日時	2014年8月某日　14：00～15：00		
実施施設名	福岡市内高齢者デイサービス実施施設	対象人数	11名（男性3名、女性8名）
派遣団体名	マリンバスケルツォ（高松聡美、羽田やす子）		
実施目的・概要	実施施設で3回目となる演奏＆ワークショップ。体験型の活動をとり入れ、より能動的な楽しみ方を提案する。		

○活動の実際

時　間	実施内容・アーティストの働きかけ	参加者の反応
14：00	施設スタッフから開始の挨拶。拍手で招き入れ。 演奏「エルクンバンチェロ」 自己紹介（はねちゃん、さとちゃん、と呼んでください）	最初、席についていたのは9名。 職員がマリンバの音に反応し盛り上げる。
14：06	演奏「道化師のギャロップ」 高松氏、マレットを叩いて手拍子を促す。 「今日やりたいことがいくつかあります。その1つが歌っていただくこと」と言いつつ「浜辺の歌」へ。歌詞の巻紙をスタッフが持って見せる。	手拍子。途中で手押し車を押した女性2名が参加。 うち1名は**曲に合わせて足でステップを踏んで見せる。** あまり大きな声は聞こえないが、口を動かし歌っている様子は見える。
14：13	マリンバ体験コーナー。マレットを差し出すが、尻込みする人が多い。職員に叩いてもらい「どうでしたか？」「カンタン」というやりとりを見せる。マリンバを席の近くに寄せてマレットを持たせる。2回ずつ体験できるよう回ると、**結局全員が体験**した。 高松氏から奏法（グリッサンド、トレモロ）の話もあった。マレットの固さの違いで音が変わることも体験してもらう。	**「いやいや」と言いながら手は出す人、1曲演奏してしまう人、マレットをすべらせるグリッサンドという奏法をやって見せる人など反応よく盛り上がる。**
14：29	演奏「ロンドンデリーの歌」トレモロを使い、途中でマレットを変えて音の違いを聴かせる。ゆったりした曲でクールダウン。	
14：35	体験コーナー（今日やりたかったことのもう1つ。家庭にあるものを楽器にする）波マシーン。ダンボールに小豆が入っていることを説明。高松氏がピアノに合わせて波の音を聴かせ、席の近くを回る。その後、1人ずつ箱を持って音を出す体験。	**全員が箱に手を出して楽しむ。 本当の波のように聴こえることに感嘆の声。**
14：40	飲料の容器で作ったシェーカー。全員に2本ずつ配布。 「おもちゃのチャチャチャ」を演奏。	**全員、両手にシェーカーを持って振っている。**
14：45	紙でっぽう配布。音を出す練習のあと、「くるみ割り人形行進曲」に合わせて。 「紙でっぽうはプレゼントです」	音が出ない人もいる。回数を重ねるうち出るようになる人もいるが、端に座る車いすの女性は最後まで出ないまま。それでも、**「小さいとき、つくりよった」と話してくれる。**他にも配布のときに「つくったことがある」と話された男性も。
14：54	演奏「真っ赤な太陽」昭和42年、美空ひばりがミニスカートで歌ったと解説。	
14：58	演奏「チャルダッシュ」早さがどんどん変わる曲。ピアノでついていくはねちゃんにも注目して！	かなり重い認知症と思われる女性、隣接する和室で寝ていたが、シェーカー体験のあたりから職員に起こされ参加を促される。参加はしていないが、このときは職員と手をつないで歩き廻っており、**マリンバの早い演奏を笑顔で見てスタッフともアイコンタクトを交わした。**
14：02	終了のあいさつ ※終了後、お茶に誘われ、合唱をしていたという女性たちと話が弾む。「また来てください」と参加者、職員ともに何度も言われる。	一番のりのよかった女性「ぶらぼぶらぼ、ダンケシェーン」と言い、ヒラオカヨウイチのマリンバ演奏を聴いたことがある、と語る。

★実施した施設の職員さんの感想

- 施設内で演奏会を催すことはあるが、今回は体験型のコンサートでとてもよかった。
- 利用者様が大変盛り上がってノリよく楽しまれていた。
- 部屋に帰るときに「楽しかった～」と言われる方も多かった。
- マリンバは演奏者の身体の動きが大きくよく見えるのもよい。
- 職員にとっても癒しの音色。
- またぜひ来ていただきたい。

マリンバスケルツォ

高齢者施設での芸術体験ワークショップ事例紹介【演劇編】

実施日時	2014年7月某日　14：00～15：00		
実施施設名	福岡市内高齢者デイサービス実施施設	対象人数	9名（男性4名、女性5名）
派遣団体名	結実企画（むすびきかく） 大福悟〈だいふく〉、吉柳佳代子〈カヨちゃん〉、小栗栖龍法〈おぐ〉		
実施目的・概要	実施施設での3回目となるワークショップ。想像力を引き出し、表現に挑戦する。 参加者を3グループに分けて、講師3人がそれぞれ違う話題でご挨拶を兼ねた会話をする。音からシーンを想像する。花火大会を題材に身体表現を試みる。		

○活動の実際

時　間	実施内容・アーティストの働きかけ	参加者の反応
14：05	施設側から講師紹介（演劇療法の先生！と紹介される） 講師自己紹介。「ご挨拶を兼ねて、3グループにわかれてお話します」	最初は8人。施設側がガムテープで名札をつくっていた。3グループに分かれ、座っている。スタッフが各1人、耳の遠い方には別途1人ついている。参加した経験があるのは3人か。 ・ラーメン屋だったTさん、船に乗っていたNさんは3回目の参加。 ・参加者同士や参加者と施設職員の話も弾んでいる。 ・話題は花火、夏の食べ物、夏に行きたい場所。 ・話の時間がやや長引き、話題が途切れる感じになる場面も。
14：24	参加者が増えたのをきっかけにカヨちゃん、音を用意してきたので聞いてください、と展開する。 CDの用意をする間、おぐと大福に何の話をしていたか尋ねる。	車いすの男性1人加わる。 カヨちゃんに、おぐときょうだい？およめさん？などの声がかかる。カヨちゃん、軽妙に受け答え「トシがずいぶん違いますよ～」。
14：28	音を聞いて「なんの音？」 ウグイス、すずめ、せみ、揚げ物の音、大根を切る音、花火の音など。季節が春から夏へ、家の中から外へと移動するイメージであることを補足して話す。	ウグイスの声に「とり」「せみ（？）」。 掃除機や蚊の音など、聞こえにくい音域のものもあり、耳の遠いMさんには施設職員が「○の音」と教えている。 **花火の音には「たまやー」と声を掛けるTさん。**
14：44	花火大会に行ったことがありますか？ じゃあ、行ったことのないBさんのためにみんなで花火大会の様子をやってみましょう。花火はどんな風に上がりますか？ 下から上にあがる花火の様子をやってみて。おぐ、全身でやって見せる。ひゅーっひゅーっと高く上がる様子を見せるが、ややぬるく弾ける。 「こんな感じですか？」 おぐもう1度。「何か足りない？」	Bさん「行ったことない」 「ひゅーっと上がってバーン」 花火のことをいろいろと話し出すAさん。 「ナイアガラ、仕掛け花火、おっきなの」 「上がって、少ししてから音が出る、時間差」 「最初煙が出る」「こうあるやろ。火が付いたらぱっぱっぱっとね」
14：50	大きいのをやったから今度は線香花火をしましょう。どうやって持つ？	**耳の遠いMさん、線香花火、と職員から聞いて持つしぐさをする。**Aさん、小さいころやっていたへび花火や落下傘花火の話をしきりにする。
14：53	じゃあ、2人（おぐ＋大福）の大きな花火を2発見た後、みんなで線香花火を楽しんで花火大会を終わりましょう。2人の二連大花火（身体表現）。 「線香花火」を配るしぐさ。火をつけてまわるしぐさ。 パチパチ、きれいですね。ああ、みんな落ちましたね。	パチパチと拍手がわく。 **全員「線香花火」を持つしぐさ。最後の方の人にまだ火をつけていないのに、最初につけたNさん「あー、落ちた」などと言っている。**
15：00	花火のにおい、夏のにおいですね。	

★実施した施設の職員さんの感想

・日頃は見られないような素敵な笑顔がたくさん見られた。
・ほとんど話をされない方が、今日はよくおしゃべりをされていた。
・参加された方が翌日、「昨日はいろいろな話ができて楽しかった」と話しておられた。
・「線香花火」は実物がないのに、高齢者の方もしっかりイメージして動いておられたので驚いた。
・またぜひ来ていただきたい。

結実企画（むすびきかく）

「高齢者とアートのしあわせな出会いセミナー」の記録

日　時：2015 年 2 月 11 日（水祝）14：00 ～ 17：00
場　所：福岡市市民福祉プラザ 501 研修室（福岡市中央区荒戸 3-3-39）
対　象：高齢者福祉関係者、芸術文化活動関係者、行政関係者、そのほか関心のある方
参加者：約 40 名
参加費：無料
後　援：福岡市、（公財）福岡市文化芸術振興財団、（社福）福岡市社会福祉協議会
主　催：アートサポートふくおか
登壇者：●認定 NPO 法人芸術資源開発機構 ARDA 代表理事　並河　恵美子氏
現代美術画廊活動を経て「アートの資源を社会に活かす」をミッションに、杉並区在住の美術関係者と 2002 年に ARDA を設立。「アートで介護」「アートで保育」「アートで学ぶ」「アートで結ぶ」をモットーに地域の様々な施設へアーティストによるワークショップを届ける「アートデリバリー」活動を行う。10 年余に及ぶ高齢者施設での活動を検証し報告書とハンドブック・DVD を出版。その他、関連シンポジウム、展覧会企画運営、等。http://www.arda.jp

●体奏家・ダンスアーティスト　新井　英夫氏
自然に沿いしなやかに力を抜く身体メソッド「野口体操」を創始者野口三千三氏より学び深い影響を受ける。投げ銭方式の公演などユニークな演劇活動を経てダンスの道へ。マチと自然とヒトびとを結ぶことをテーマに国内外での公演活動を行っている。また乳幼児～高齢者まで、障碍の有無を越えてバリアフリーな身体表現ワークショップを各地で展開中。山形大学、天理医療大学非常勤講師。料理と落語好き。

●（公財）熊本県立劇場事務局次長　兼　企画事業課長　本田　恵介氏
1982 年、財団法人熊本県立劇場職員に採用される。2001 年度から「公共ホール制作スタッフ養成講座」を開講し、アートマネジメントや舞台技術の普及を図る。近年は、（一財）地域創造の公共ホール音楽活性化アウトリーチ・フォーラム事業や邦楽地域活性化事業、地域文化コーディネーター養成研修事業を実施し、アウトリーチや人材育成に力を入れているほか、熊本県芸術文化祭オープニングステージ制作統括として、地域文化の育成・普及に幅広く取り組んでいる。

進　行：アートサポートふくおか代表　古賀　弥生

古賀　本日はお寒い中ご参加いただき、まことにありがとうございます。アートサポートふくおか代表の古賀弥生です。

最初に、本日ご登壇のみなさまをご紹介させていただきます。NPO法人芸術資源開発機構 ARDA（アルダ）代表理事・並河恵美子さん、体奏家・ダンスアーティストの新井英夫さん、公益財団法人熊本県立劇場事務局次長兼企画事業課長の本田恵介さんです。お三方にはのちほど、NPO、アーティスト、公立文化施設それぞれのお立場から、高齢者とアートの関わりについてお話いただきます。

さて恐縮ですが、少し長めの主催者挨拶をさせてください。アートサポートふくおかは、「誰もが芸術文化を身近に楽しめる環境づくり」をミッションとする民間非営利団体（NPO）です。設立から 14 年目、当初の 10 年あまり、子どもの芸術体験の機会拡大を事業の柱としてきました。しかし、10 年継続していると世の中変わるもので、当初は学校にアーティストが行って子どもたちと一緒に活動する機会は少なかったのですが、今はずいぶん増えてきました。そこで、アートサポートふくおかとしては次の段階に進みたいと考え、高齢者施設での芸術体験の機会をつくることにしました。

きっかけは私自身の父が認知症で施設にお世話になったことです。父はすでに亡くなりましたが、施設には本当によくしていただきました。実の娘にはできないお世話をしていただいたのですが、残念ながら父の施設では文化的な体験をする機会はほとんどありませんでした。私は 20 年ほど前に北欧の国々に視察に行く機会があり、高福祉の国では、文化も福祉の一部と考えられている、と知りました。つまり、人生・生きることの質（QOL）の向上に大切なことはすべて福祉の領域に含まれるということです。具体例を挙げると、スウェーデン・ストックホルムでは病院や施設に入っていても本人が希望すれば文化的な体験をする機会が保障される、そのためにアーティストカタログというものが作られていて、カタログを見てこの人に来てほしいと希望があれば、最小の単位では寝たきりの方の枕もとで俳優が朗読をするサービスも提供される、という仕組みがありました。その費用は本人や病院ではなく、国と自治体が半分ずつ負担すると

聞きました。あくまで当時、私が聞き取った話ですので、正確かどうか、そして現在も続いているのかどうかはわかりませんが。

人は生まれてから亡くなるまで、感動したりワクワクドキドキしたりする権利がある、私はそう信じていますし、それを保障する社会であってほしいと願っています。ささやかな活動ですが、将来的にはきっと介護や医療の分野でアーティストの協力による芸術体験が標準サービスになる日が来ると信じ、そのさきがけとして動き始めたところです。さきほどからスクリーンに投影している写真は福岡県宗像市の特養むなかたという施設で今年度実施させていただいた紙染めの小物入れづくりとダンスワークショップの様子(p1 参照)です。小物入れづくりはNPO 法人アートもんさんに協力していただきました。また、ダンスについては福岡を中心に活躍するマニシアさんにご指導いただきました。いずれの活動も施設職員のみなさんの全面協力のもと、笑顔のあふれる時間を共有することができました。宗像市でのこの活動は、宗像市役所のお力添えもあって実現していることです。宗像市では「文化芸術のまちづくり 10 年ビジョン」が策定され、このビジョンにもとづいて文化政策が展開されていますが、文化の力を教育や福祉、まちづくりなど文化以外の社会の領域に及ぼしていく、という方向性が位置づけられていて、その具体化の一環として私どもとご一緒していただいています。このような流れが各地で、まだ盛んとまではいえませんが、すでに始まっている、ということも本日みなさまにお伝えしたいことのひとつです。

今日のセミナーは、人生の最終ステージまで芸術の力でイキイキと生き抜くことができる社会をどのようにつくっていけるのかを考えるきっかけとしたいと思い企画しました。このあとは、まず ARDA の並河さんから高齢者施設へのアートデリバリーを中心に ARDA のご活動について現状と課題も含めてお話いただきます。今回は ARDA のお取り組みについてうかがうことを基調講演のような位置づけとしておりますので、並河さんのお話のボリュームが大きくなります。そのあと、アートデリバリーにアーティストとしてご一緒されている新井さんにも加わっていただき、アーティストの立場からお感じになることなどをお話いただきたいと思います。さらに、熊本県立劇場の本田さんには、アウトリーチという言葉で表現されるのですが、劇場が施設から外へ出て芸術文化を地域に届ける活動を展開されるなかで、高齢者施設にも関わりを持たれるようになっている状況を御報告いただきます。そして全員の方にご登壇いただき、会場のみなさまとのやりとり、という流れで前半を進めます。いったん休憩をはさみ、後半は 1 時間ほどの時間で新井さんによるダンスの体験ワークショップ、高齢者施設で新井さんがなさっている活動を知っていただく意味合いも含めて体験していただきたいと思います。

こうした活動をもっと拡大していくにはどうしたらよいのか、課題も含めて浮かび上がらせることができればと思います。決して結論が出るものではないと思いますが、私自身も含めご参加のみなさまがそれぞれにお考えいただく一助となればと思います。

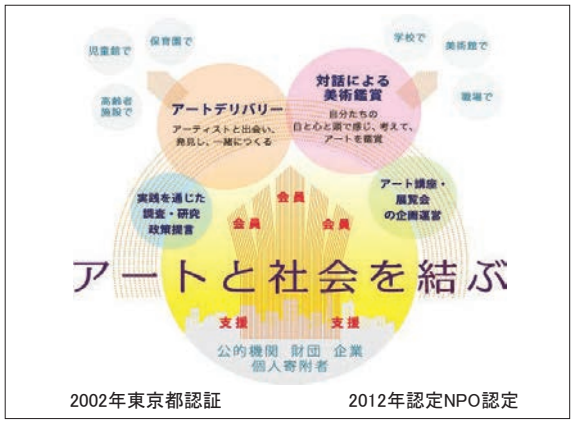
では、並河さんにご登壇いただきましょう。

並河　並河です。今日は私たちの活動についてお話させていただく機会をいただき、たいへんうれしく思っております。ARDA は活動を始めて 10 年以上になります。ここに至るまでの運営資金は助成金や企業からの支援によるものです。2011 年に 1 年かけて「2010 年度ファイザープログラム～心とからだのヘルスケアに関する市民活動・市民研究支援」を得て「高齢者施設へアートデリバリー：アートによるケアの可能性に関する調査」報告と普及版として DVD 付きのハンドブックを出版しました。これは、10 年余りの活動の集大成としてまとめたものです。本日、会場でハンドブックを販売していますので、ご興味のある方は、よろしくお願いします。10 年経ったらその後はもうちょっとアートと高齢者福祉の関係が社会に広がるかと思っていましたが、まだまだ苦戦しております。今、古賀さんのお話をうかがって多少光が見えてきたと思いました。

ARDA の活動について

私たちは、芸術は個人が人間らしく生きるために欠くことのできない社会的な役割を持っていると考えております。ARDA は一人ひとりが自分らしく心豊かに生きられるコミュニティの創造と実現を目指して芸術と言う資源を社会に生かす活動を行います。同時代に生きる私たちの諸問題を芸術活動を通してともに考え新しい方向を探りたいと思っております。これは、私たちの活動を図にしたものです(図参照)。

2002 年に杉並区の現代美術関係者 6 名で NPO を立



ち上げ東京都より認証を得ました。その後、2012年に認定NPOを取得いたしました。現在の活動には2つの柱があります。1つはアートデリバリーで設立当時からやっております。もう1つは対話による美術鑑賞。学校や美術館で対話型の鑑賞をボランティアを育成してやっております。活動を支えるのはまずは会員、そして事業ごとに行政との協働、助成金や、寄付をいただいたりして進めています。

アートデリバリー

今日の主な内容はアートデリバリーですが、地域の保育園、児童館、高齢者施設などにアーティストによるワークショップを届けます。関わるすべての人の心と体をときほぐし、生きる力をつくる活動です。高齢者施設へのアートデリバリーの目的は、高齢者施設での日々の介護にアート活動をとり入れるためのスタッフ教育と個々の心の開放をめざします。アートで五感を刺激して潜在能力を引き出し、高齢者へ単なる余暇活動にとどまらない創造の機会を提供します。そして、アートを通して社会全体におけるクオリティ・オブ・ライフの向上を推進するものです。

その内容は、まず、介護士や施設職員へアーティストによるアート講座を行います。これは、日常の業務から解放され「自分」らしさを取り戻すということと、実際にお年寄りへのワークショップを行うための事前講座と同時に、打ち合せも兼ねています。そして、その数日後に通所者または入所者へのワークショップとなります。アーティストの誘導で、自然と自分らしい表現ができます。そのプロセスをみんなで楽しみます。「造形」「音」「身体」からジャンルを選択していただいています。そこでは内外でご活躍の新鋭アーティストのワークショップをお届けしています。

ここでDVDを見ていただいて実際にどんなことをしているのかをご覧ください。

～ARDAが2011年に制作したDVD「アートで介護：アートがひらくケアの可能性」の一部上映約20分～

※このDVDはARDAのホームページから購入を申し込むことができます。

アートデリバリーの効果

ご覧いただいたようなアートデリバリーの効果ですが、高齢者、アーティスト、施設スタッフにとってどうなのかをそれぞれに述べていきます。まず、高齢者にとっては、失われたと思われていた能力が引き出される、ということがあります。表情が豊かになる、声や身振り、リズムが出る、言葉が出る、集中力が出る、というようなことが実際に起こります。次に、豊かな記憶・思い出を受け止める場となります。例えば、日常には出せない感情が、造形作品や自由な踊り、歌となって現れることがありますし、参加者と同時代の思い出を共有する喜びを持つことにもなります。そして、他の人々とつながる一体感をあじわう効果もあります。周りの人々とつながる緊張感を持ったり、周りの人をほめる、気遣う気持ちが生まれます。また、アーティストから自分の名前を呼ばれて、皆の前で専門的な講評を受けほめられることで、自己肯定感が生まれます。

アーティストにとっては、「アーティストとして生きる意味、表現する根源性を問われる」「人として生きていく力をもらう大切な時間」「身体的なアプローチから眠っている経験、記憶、感情を引き出す工夫が必要」「この場で新しく生まれる予期せぬ表現がでてくる時間」「作品制作とはちがうコミュニケーションの場が持てる」「自分をためされるこわい現場」などの声が挙がっています。

施設スタッフにとっては、施設スタッフ自身の心の解放となるという点が挙げられます。アーティストとの出会いによって、柔軟な視点や異なる価値観に触れることができ、自分の表現を通して、自分を発見して自己回復と癒しの時間となるようです。また、高齢者との関係が変わることもあります。高齢者の意外な面や能力を発見して、親しみや尊敬の気持ちが深まる、一緒にワークショップに参加すると「あなたは面白い人ですね」などと言われ人として対等な関係性を実感するということがあります。日常では介護する人・される人という関係で、お年寄りはいつも「ありがとうございます」と言うばかりです。介護者にとっては、この方は足が悪い方・言葉が出ない方だからこういうふうにしよう、と接しておられますが、また違った対等な関係性ができる、ということです。それから、意外と施設で働く方は同僚の個性に触れる機会がないので、一緒にアート活動をすることで同僚のいつもとは違う意外な面を発見して、コミュニケーションが深まるようです。

コーディネーター・コミュニケーターの役割

このような活動を支えているのは、私のようなコーディネーター、そしてコミュニケーターです。コーディネーターの役割は、プロジェクトの全体を統括し、施設とアーティストのマッチング、講座、ワークショップに関わるというものです。コミュニケーターは、ワークショップ内容を理解して、アーティストと利用者さんの間に入って進行を手助けします。その現場に居合わせた人たちとの協働であるという意識を持つことを忘れてはなりません。そういうことを通して、会場の一体感、相互交感できた一瞬が私たちにとってはエネルギーとなっています。

この活動を行うにあたっては、まず施設のスタッフの人たちに体験をしていただいて、どういうことに気をつけたらいいかを検討しています。

今、ご覧いただいたDVDは、この活動を広め理解者を増やすには言葉や写真では不十分だと考えて制作しました。各作家1時間のワークショップのハイライトを4

分でまとめたダイジェスト版です。DVD 制作にあたっては映っている方のご家族にも許可をいただきました。介護士さんには各アーティストのワークショップにどの方に出ていただくか、50 名くらいの利用者の中から 12 名程度を選んでいただき、普段あまり関わり合ってない方同士を隣にするよう座席を決めてもらいました。各ワークショップには、関係する専門家に参加していただきました。ワークショップのプロセスや成果を報告書にまとめ、アーティストの働きかけに高齢者がどう反応したかなども記載しています。活動のあとには毎回、振り返りを行っています。DVD の新井さんの活動で（想像の世界で）お芋を食べて「おいしかった」とおっしゃっている方はずっとうれしそうにされていたのですが、スタッフの方にうかがうと実はいつも大きな声で文句ばかり言われている（笑）そうで、ビックリしました。このときはうれしい言葉に変わっていたのです。ほかにも、いつもトイレに 10 分おきに行かれる方が 1 時間ほどのワークショップの間、集中していたとかいろんなことが聞かれます。アーティストの力はすごいですね。

活動の問題点はいろいろあるのですが、またのちほど、みなさんにも一緒に考えていただきたいと思いますのでよろしくお願いします。

古賀　並河さんありがとうございました。新井さんも前の方においでいただいてよろしいですか？

今、ARDA の活動を紹介され、みなさん、特に DVD をご覧になっていろいろなことをお感じになったのではないかと思います。まず、新井さんにお尋ねしたいのは、アーティストとしてこのような活動にかかわる意味についてです。実は、新井さんが高齢者との活動に関わったのは ARDA さんから声がかかったのがきっかけだったそうですね。

アーティストが高齢者と関わるきっかけ

新井　そうですね。今、ARDA の代表理事のおひとりになられている三ツ木紀英さんを通して並河さんを紹介していただき、それで本格的に高齢者施設でのワークショップを始めることになりました。2002 年ぐらいからだったように思います。

古賀　それまでは子どもたちとの活動が多かったのですね。

新井　子ども対象の経験はありました。

古賀　高齢者との活動についてのお話があったとき、どう思われましたか？

新井　興味と不安の両方がありましたが、「とりあえずやってみよう」というところでしょうか。認知症の方、身体の動かない方との活動は経験がないまま、いきなり現場がやってきた感じです。やっていくうちに失敗やヒヤっとする場面もあって、まずは安全確保ということがとにかく大事だということを思い知りました。どうしてもぼくはダンス、身体表現なので、たくさん動いていただきたい、動かしたいという思いがあったのですが、必ずしも体を動かすことだけが重要ではないんですね。例えば DVD のなかで私の事例紹介の中で最後に突然立って「今日はありがとうございました。ではお礼に唄います」と唄い出してくださった男性がいらっしゃいましたよね。あのように身体的にたくさん動いていなくても心が動く、気持ちが動くといいんだなということがわかってきました。それでだんだん自分の中で高齢者向けワークショップの在り方が練れてきた気がします。教科書やマニュアルがあったわけではなく、参加者の方たちスタッフの方たちと共に手探りでつくっていった、いわば現場たたき上げですね（笑）。

古賀　三ツ木さんからの紹介とのことですが、並河さん、高齢者との活動に経験があるわけではない新井さんに関わってもらおうと決められた経緯はどうだったんでしょうか？

並河　私自身も前例がないことで、自分の思い込みで進んだ感じで、1 回ずつ、今度はこうしたら、と思いながら進めています。三ツ木さんの企画で「どんな感じと説明できない面白い人がいる」というので、とにかく新井さんのワークショップを見に葉山美術館まで行ったのですよね。そのうえでやってみたらどうか、ということになりました。10 年かけてここまで来ましたが、アーティストの方たちも一期一会の手探りですよ。

古賀　すてきな映像を見せていただきましたが、どのアーティストさんも最初から高齢者との活動の経験があったわけでもないんですね。

並河　ここで記録されている方々は個人では活動経験をお持ちです。みわはるきさんはお父様が入院されていて、そこで亡くなられたのですが、そのことがきっかけで高齢者と関わり始められたそうです。藤原ゆみこさんも同様でお父様が亡くなられたときに自分ができることを考え施設に継続的に通い医療関係との連携もされているようです。岩下徹さんは山海塾のダンサーでソロ発表もされていて、精神病院でのワークショップを長くやっておられます。野村誠さんはご自分のアーティスティックな動機から横浜の高齢者施設に出かけて行ってお年寄りと一緒に作曲するなどの活動を ARDA と同じ年に開始され今も続けておられます。野村さんは最近、高齢者と一緒に作った曲とご自分の曲のコラボをしたりもされています。DVD では見ていただいた部分のあとに、アーティスト一人ひとりにインタビューした映像があるのですが、野村さんの場合はこれをひとつのアート的な素材、テーマにしていると語っています。自分が高齢になったときに、今のお年寄りと作った曲との共同演奏会のようなものをやりたいというようなことをおっしゃっています。ですから、関わり方はそれぞれ

違うのですが、どこかでこういうことに関心があったアーティストとご一緒していますね。

古賀　そういう方をある意味、選ばれたということでしょうか。関わってくださるアーティストにどのようなことを求めるのか、どなたに来ていただくのかを決める過程をうかがいたいのですが。

並河　この人に来て頂いたらどんなことが起こるのか想像しながら…とある意味の好奇心ですね。この人に依頼したらこういう効果があるから高齢者にいいだろう、ということより、私の好奇心。ホントはいけないのかもしれませんが、こういうことがないとエネルギーにならないですよね。

古賀　「私が見たい！」ということですか？

並河　そうです（笑）そういうことです。自分のエネルギーがなくなったら、しぼんじゃうかもしれないし、何か起こるのじゃないか、という期待で自分もイキイキできるのですよね。やる側がおもしろくないと続かなかったと思うし、義務だったらやらないですよね。

アーティストにとっての意義

古賀　新井さん、さきほどの並河さんのご報告のなかでアーティストにとってのこの活動の意義がまとめられていましたが、あらためて新井さんにとってはこのような活動はどのような意味があると思っていらっしゃいますか？

新井　意味というと、アートが福祉の役に立つか？ とか効果目的や社会的貢献が期待されているのかもしれません。それも、もちろんあるにはある。でも一番は自分自身が表現者としての興味としておもしろがってやっています。これはアートなのか？何なのか？まだ名付けられない未分化のアートの原型、あるいはアートの未来形みたいな出来事が起きている現場です。だからおもしろくてスリリングです。

確かに並河さんのお話にあったように「厳しい現場」です。厳しいですが、おもしろい。例えば劇場でダンスの公演をして見に来てくれるお客さんは、ダンスを見るつもりで来ていますよね。ある意味の予定調和があります。でも高齢者の方はご自分のはっきりした意思で参加されている方ばかりでもない、でも、始まったらどう惹きつけて、一緒に何かやって、あわよくばみんながちょっとずついい感じになって・・・って簡単ではないですよね？これって（笑）。でも、それがうまく成立したときにすごく喜びが大きい。つまんなかったらいなくなっちゃったり、まったく関心を示してくれませんので、こちらの本質が問われるごまかしのきかないコミュニケーションの場です。僕は舞台でパフォーマンスする側ですが、舞台でお客さんに見てもらうこととワークショップの場を参加者と共に双方向でつくるということはほとんど同じ意味合いの活動です。社会に対する接点として、舞台での表現とワークショップとは私にとって車の両輪みたいなものです。

古賀　新井さんは子どもたちや障がいのある方たちとの活動もされていますが、高齢者との活動で特に違うこと、気を付けていることはありますか？

新井　ひとつは言葉づかいや接し方ですかね。ニックネームでお呼びすることもありますが、自分より年上の方ですから人生の先輩に対して敬う気持ちは自然と出てきます。あとは、みんなでやるから盛り上がる面もありますが、なるべくお一人おひとりに丁寧に接する時間を設け、その個性が表れることを大切にしています。特に高齢者の方は輪の中で他者に見られたり、注目されることで発揮される力もあります。

活動の広がりと、それを妨げるもの

古賀　ARDA さんとご一緒される以外に、熊本県立劇場の事業でも高齢者施設での活動をされていますが、ほかにも機会はありますか？

新井　（一財）地域創造の公共ホール現代ダンス活性化事業というのがあって、アートと地域の福祉連携のモデルケースづくりとして、公共ホール主導で高齢者施設でのダンスワークショップを 2010 年から千葉・和歌山・鹿児島・青森・兵庫各県で、それぞれ単発ですがやらせていただいたことがあります。継続的な取り組みとしては岐阜県の公共ホール可児市文化創造センター ala（アーラ）での 65 才以上の高齢者向けの仲間づくりワークショップ「まち元気プロジェクト」にも 2012 年から関わっています。そして珍しい例をひとつ、長野県の茅野市で 2013 と 2014 年度の介護予防事業に関わったことがあります。介護保険の御世話になる前に 65 歳以上の方が地域で集まって、食生活に気をつけましょうとか血圧の管理とかを 3 カ月でひとつの講座で行ったりしているのですが、そのなかでアート系のワークショップを入れてみたいと市役所から相談を受けました。担当の方が理解のある方だったし、この地域は諏訪中央病院という鎌田實医師がおられることで有名な病院があるところで、金子一明さんという若いドクターがダンス好きで後押ししてくれたり、といういろんな縁が重なってやらせていただいたことがあります。身体が動かなくなったりする前の段階の方が対象なので、和気あいあいと非常に楽しい活動をさせていただいています。

古賀　介護予防にアーティストが関わる動きも始まっているんですね。

新井　出始めた感じですね。やわらかい考えと実行力のある方がたまたま複数いたからですが、とにかくやってみよう、と。

古賀　ARDA さんとの活動のなかで、高齢者とアーティ

ストが関わる活動は広がっている感じですか？

新井　僕が知る限りでは東京都内でARDA以外でこういうアーティストが施設に出向く事業を多くされているところはないように思います。ただ、豊島区に「ふれあい館」という地域ごとのコミュニティセンターがあって、午前中は高齢者と赤ちゃん連れの方の場所になっていて、午後は児童館、夜は市民サークルの活動場所というところなんです。そこを拠点に防災という視点で普段からコミュニティづくりに力を入れたい、世代間交流として何かできないか、というお話がありました。それで未就園児の親子さんと高齢者が一緒にからだほぐしや表現活動で交流してみよう、ということがありましたね。豊島区の主催事業でNPO法人「芸術家と子どもたち」のコーディネートでした。一回限りの試みでしたがおもしろかったです。ただ、知る限りではあまり他に事例がないかな。小学校での活動のほうが10年前に比べると格段に増えましたね。文科省や文化庁などの芸術ワークショップ体験の助成制度も出来ましたし。高齢者向けはまだ弱いですね。

古賀　どうやって広げていくかというお話もしていきたいのですが、並河さん、ARDAさんのご活動で10年目のときに節目として大きなセミナーを開催されたそうですね。その後の広がりはどうですか？

並河　なかなか難しいですね。今、施設側が提供するサービスは介護保険で実施されていますが、そこにこういう特別な活動を入り込ませる余地はないですね。作業療法士さん、理学療法士さんが実施する療法は入っていますが、私たちの活動は療法とはいえませんし、どういう効果があるのかデータもないのでやってみないとわかりません、では説得力がないわけです。埼玉県で助成金をいただいて6施設程度実施したり港区でやったりはしましたが、続かないですね。施設側は行政から言われたから受け入れた、ということで終わってしまいます。なぜそうなのか、難しいところですが、杉並区の上井草園では活動開始時からアートデリバリーをさせていただいていて、ここは所長さんが「きれいにする・食べさせる・排泄する、という三大介護だけではダメだと分りました。あなたのやっているようなことが大切なのです」と言って背中を押してくださったんです。だから続けられたんですね。社会福祉法人で連携施設等を持っている法人なので他にも広げたいと所長さんと共同で理事会に企画書を出させていただいたのですが、一発でダメでしたね(笑)。作業療法士さんや地域のボランティアさんがやってくれていることとアーティストが来るのとどう違うのか、と言われました。

古賀　ボランティアと同じ扱いをされる経験は私もあります。

並河　高齢者の後に児童館でのアートデリバリーを始めました。杉並区の41の児童館に、助成金をもらいながら1年に4館程度実施して10年かけてすべてを回りました。5年目に港区から電話がかかってきてアートデリバリーの話を聞きたいと言われたんです。文化芸術振興条例と基金が作られて、何かしなくてはと、ホームページで探してARDAがヒットしたようです。それで、2008年から公立保育園、そして私立、公設民営などたくさんできた保育施設に行くようになりました。子育て支援に関しては方向性が定まり、未就学児のための活動は行政からの委託でずいぶん続いています。それで、高齢者もぜひやってほしいと港区で2年間やらせていただいたのですが、やっぱり難しいですね。例えば大きな施設でボランティアコーディネーターという方がおられるところがあって、それはすばらしいのですが、私たちにとってはそうでもなかったのですね。音楽を聞かせたり、カラオケをしたり、編み物をしたり、いろんなボランティアさんが登録していて何曜日の何時はどのボランティアさんが来る、とコーディネートされるわけです。私たちもボランティアのなかに入れられてしまって、スケジュールのなかには入っても、私たちは介護士と話をし、まず介護士の方を対象に体験講座をやらせてほしいのに、時間がとれませんと、コーディネーターが入れてくれません。いつでもいいですから話だけでも・・・とお願いして説明をさせていただき、高齢者との活動日を迎えたら、説明を聞いてくださった介護士さんがいなかった、ということがありました。いきなり活動が始まってしまうと大変なことも起きるわけです。心臓が悪いお年寄りがデイサービスに来られていて、ダンスのワークショップが楽しくなって立ち上がって踊り始めたのです。介護士さんが真っ青になって、やめてくれと。あの方は心臓が悪いから、と私に言われたので、アーティストに伝えましたが、アーティストは最後までやりたいと言われ、続けられました。何事もなかったのでホッとしましたが、その晩は眠れませんでした。そのことを施設から港区に伝えられたものですから、それでもう、次の年はダメでした。それが現実です。そういうことがあるといけないから、介護士さんの講座もやって、どういう方が参加されるのか、どんな注意が必要かも話しておきたいのに。不慮の事態を想定して覚書を交わすことも必要ですね。

古賀　新井さん、アーティストが現場で難しいな、やりづらいなと思うことはありますか？

新井　僕と利用者さんの関係は出たとこ勝負で、その場で何とかつくれるんですが、その前の打ち合わせの段階でスタッフの方たちの意向と我々アーティスト側のやりたい方向性、「今回はせっかくアーティストがくるんだから普段できないことにチャレンジしてみましょう！」みたいな合意形成ができていない場合は、難しいです。スタッフさんの協力で、輪になって座る席順の工夫ひとつで雰囲気も随分変わります。忙しい時間帯なのにボランティアの人に時間を割いてあげてるのよ、みたいな様

子だとうまくいきませんね。ただ、働いていらっしゃるスタッフのご様子を見ていると、ものすごく忙しくて余裕がないんだなということも理解できます。なんとか、みんなで楽しくやれたらいいのに。

古賀　学校もたいへんですが、高齢者施設での大変さはさらにいろいろあるなあと、私も思っているところです。では、いったん、ここでおふたりにはお席にお戻りいただき、熊本県立劇場のお話をうかがいたいと思います。

本田さん、よろしくお願いいたします。

本田　熊本県立劇場の本田と申します。初めてお会いする方がほとんどだと思いますので、劇場のことを少しご紹介させてください。

熊本県立劇場のミッション

熊本県立劇場は大きな施設としてはコンサートホールと劇場の２つのホールがありまして、ものすごく大雑把な言い方をするとアクロス福岡と博多座が一緒になったような施設です。そういうところですので、ホールの特性を生かして、国内外からすばらしい音楽や演劇を招いて上演することがひとつの大きな使命になっています。もうひとつは熊本県内では唯一の県立ホールということで、県内の牽引車役といいますか、熊本県内30数館のホール、市や町のホールを引っ張っていくという役割も果たさなければいけません。

県内ホールとの連携とアウトリーチ

そういうなかで、私どもは1990年度からネットワーク事業というものを実施しています。県立劇場で制作した公演や海外から呼んできた室内楽を県内に派遣するといったことをやっているわけですが、そういう場合、費用についても県立劇場と市町村で半分ずつ負担するという形をとって市町村の負担を軽くし、熊本市以外の地域のホールも活性化していただきたいということで取り組んでまいりました。こういう事業が25年くらい続いています。もうひとつ、コミュニケーション教育事業といっていますが、これは2007年度から始めていて、その前に2004年度からクラシックの演奏家を県内のホールに派遣して地域の小学校・中学校、福祉施設、高齢者施設などで演奏してもらうという活動を始めました。2007年度からは演劇的な手法を使って子どもたちのコミュニケーション力を高めていこうということで、演劇のワークショップを県内各地で展開しています。この事業では、劇作家の平田オリザさん、柏木陽さんといった、全国でワークショップを展開し実績が豊富で高い技術を持った方を講師に招いています。最近では、2013年度から演劇、音楽、ダンスなどアートの領域を広げまして、アートの持つ可能性を社会にどう生かせるのかをテーマとして、学校だけではなく障がい者施設、高齢者施設にも出かけていってワークショップに取り組んでいます。

今年度は特に高齢者の方へのアプローチをどうしようかと考えまして、最初はなかなかやり方に悩んだところなんですが、熊本市内に熊本保健科学大学という医療系の大学があります。ここと連携をして作業療法士を目指す学生さんに対するワークショプを、講師を招いてやっていただきました。そして、大学が実習の現場として関わっている高齢者施設にも学生さんと一緒に出向き、高齢者の方へのワークショップを実施しています。今日おいでの新井さんにも今月、実際に高齢者施設に行っていただくことになっています。現場の様子については、さきほどのARDAさんのDVDでご覧になった状況に近いと思います。私自身は今年度の高齢者施設での事業について、現場をたくさん見ることができていないので、詳しいことはこの事業の担当者が今日来ておりますので、何かありましたら後ほどそちらにお尋ねいただければと思います。

社会的包摂ということ

実は３年前、2012年に国が「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」という、一般的には劇場法と呼ばれている法律を定めました。その翌年2013年に、この法律にもとづいて「劇場、音楽堂等の事業の活性化のための取組に関する指針」というものを国が示しております。その前文に「個人の年齢若しくは性別又は個人を取り巻く社会的状況等にかかわりなく、全ての国民が、潤いと誇りを感じることのできる心豊かな生活を実現するための場として、また、社会参加の機会を開く社会包摂の機能を有する基盤として、常に活力ある社会を構築するための大きな役割を担っている」と書かれています。劇場やホールといわれるところがそういう役割を担っている、ということを国がきちんと示しているんですね。私どものような県立の施設に限らず、全国には市町村も含めますと２千数百の施設があります。そういうところも、ここに謳われているように、「国民が心豊かな生活を実現するための場」としての役割を担ってください、ということを法律で示した、ということになりますので、ホールとしては、そしてホールで働く者は、そういうことを踏まえていろんな事業に取り組んでいく必要があることになります。ただ、ホールはそういう場ですよ、とは書いてあるんですが、自分の意思で足を運べない小さな子どもたちや障がいのある方、それから高齢者の方には当然、ホールが待っていて「来てください」といってもかなわないですから、アーティストの方から出向いていく、こういう活動をアウトリーチと呼んでいますが、アウトリーチ活動をホールが積極的に展開することで、前文に書いてあるような「潤いと誇りを感じることのできる心豊かな生活を実現」できることにつながると思います。

また、さきほどの指針の最初の方に「設置者(県や市町村)または運営者(劇場を運営している自治体や財団・民間・NPO などの指定管理者)が、実演芸術団体や国、地方公共団体、教育機関等と連携・協力して事業を進める際の目指すべき方向性を示したもの」とありますので、一番重要なのは自治体関係者のみなさん、できれば県知事さん、市長さん、町長さんがこの法律の趣旨を理解していただいて、しっかり予算をつけるなり、あるいは担当部局にそういう事業を推進するよう指示をしていただくことではないかと思っています。

さきほどの新井さんのお話にも出ましたが、岐阜県に可児市文化創造センターというところがあります。衛紀生さんという館長さんがいらっしゃって、しょっちゅういろんな文章を書いておられますが、今年書かれた文章のなかから引用させていただきたいと思います(可児市文化創造センター公式サイトの「館長の部屋」2015 年 1 月 21 日「劇場は人々を幸福にできるか ― 岐路の年の初めに思う」)。イギリスでは財政的に厳しい環境の中で、「Social Prescribing(ｿｰｼｬﾙ･ﾌﾟﾘｽｸﾗｲﾋﾞﾝｸﾞ 社会処方箋)」という考え方が芸術評議会の責任者から出されたそうです。比較的最近の話だそうですが、どういうことかと言いますと、文化芸術が持っている社会包摂機能を保健医療機関と協働することで社会の健全化に役立てようというもので、さきほど北欧の話を古賀さんがされていたのとつながることだと思います。具体的にはイングリッシュ・ナショナルバレエ(英国国立バレエ)が行ったパーキンソン症患者へのプログラム、リバプール博物館での認知症患者への支援、南スタッフォードシャーと当地のナショナル・ヘルス・サービスのコラボレーションによるアルツハイマー症患者の合唱プログラム等々、多くのプロジェクトが挙げられるそうです。要するにいろいろなプロジェクトにアートと医療が一緒になって取り組んでいるということのようです。日本の劇場、ホールも、すでに教育機関とのコラボレーションは広がっていると思いますが、福祉・医療機関との連携によって文化芸術の持つ力を活用したアプローチが今後求められてくるのではないかと思います。劇場の行う事業というのは、どうしても一般の方からは、一部の趣味の人のためになぜこんなに税金を使わないといけないんだ、という批判を受けることがあるのですが、こういう社会的な役割のために、多くの方が「そういうことのために芸術とか文化があるのなら、それは意味があるよね」と理解していただく、そういうことが多くの市民の方に文化芸術を理解していただくきっかけになるんじゃないかと思います。

熊本県立劇場がこれから果たすべき役割

最初に申しましたように、熊本県立劇場はひとつの文化施設ではありますが、県全体の文化芸術を牽引していく役割も担っています。これまでさまざまなワークショップやアウトリーチと呼ばれる事業に取り組んできましたが、県内全域について私どもの施設だけでやっていくのは予算的にも人的にも限度があります。幸い、県内のホールとはネットワーク事業なども長年の実績がありますし、県立の施設ということで県のさまざまな機関を通じて市町村に働きかけることも比較的容易な立場にあると思いますので、県立劇場が国内外の先進的な取り組みを参考にして、まずモデルになるような事業を開発して自治体とか市町村ホールを通して普及させていく。そしてもし、それだったらうちの町でもやってみようか、というところが出てくれば、たとえば新井さんのように全国にはいろいろな活動をされているアーティストがいらっしゃいますので、そういった方々をご紹介する。または今日のこのセミナーのような普及活動を積極的にこれから展開していくことで、熊本県内にこうした活動を広げていくことが、今後の我々の使命ではないかと考えているところです。

古賀　ありがとうございました。今日、本田さんにおいでいただいたのは、熊本県立劇場の取り組みが全国的にも先進的な事例だと思ったからです。高齢者施設へのアプローチを劇場のお立場でされていますね。劇場法のなかで社会包摂が劇場の役割の一環として位置づけられているとはいえ、今はまだ具体的な動きをしている館が少ないなかで、九州ではいち早く取り組みを進められているので、それを福岡の皆さんにも知っていただきたくてお招きしました。今日も何人か文化施設関係者もご参加ですが、私が期待したほどたくさんではありません。福岡県内のホール関係者にはもっと来てほしかったんです。今日は祝日なので事業があってご参加いただけなかったのでしょうが、まだ関心が低調なのかもしれませんね。熊本県内では市町村のホールでこういう取り組みが進みそうですか？

本田　わかりませんね。ホールは文化庁とのつながりがありますし、文化庁と文科省の連携と一緒で、学校との連携はこれまでも行われてきましたし違和感がありませんが、福祉施設となった場合には大変だと思います。お年寄りの前で演奏会をするレベルであればこれまでもやっていましたし、受け入れてくれると思いますが、新井さんがいきなりおいでになったらビックリされるかもしれませんね。でも、そこで利用者の方が変わっていくところをご覧になると、施設の方も驚かれるでしょう。そのときにホールの館長なり職員さんなりが、よし、じゃあ次はこっちの施設に行ってもらおう、という発想になるかどうか、そこは今のところ何とも申し上げられないですね。やってみなければわからないところがあります。

古賀　そのなかで県立劇場として市町村のホールにモデルを示されるような取り組みをされているわけで、そこが私は貴重なことだと考えています。

《質疑応答》

古賀　では、ここで並河さん、新井さんにももう１度ご登壇いただき、お三方に対して会場の皆様からご質問をお受けしたいと思います。

会場　新井さんと並河さんに質問です。新井さんが現場に行かれて失敗したエピソードはありますか？　「失敗」というのがどういうことなのかを知りたいのと、失敗を次にどうつなげていかれたのかをお聞きしたいです。それから、アートデリバリーでは振り返りを重要視されているようですが、振り返りはどのように設定されているのでしょうか？

新井　始めの頃はどれぐらいまで動いて大丈夫かわからなかったんですね。みんなで手をつないで歩きましょう、とやったときに転倒ギリギリという状況が起こったことがありました。僕は楽しい雰囲気づくりをしたいので、笛やタイコを自分で演奏して場を盛り上げるのですが、それで気持ちが高揚した方が可動範囲以上に動かれたようで、あわや、ということがありました。その後、そういうときはスタッフの方に必ず高齢者の間に入っていただくとか、事前情報で歩行可能な方は何人いますか、と聞いておく、もしくはその場で「歩いてこれを一緒にやってくれる方、いますか？」と聞くようにしています。ご本人が手を挙げられても、「大丈夫ですね」とスタッフの方に目配せをして「ニコッ」とされたらやってみるようにしています。

並河　振り返りは大切なので必ず実施します。介護士さんたちがアートデリバリーの活動後にやることがある場合はそれが終ってから、それぞれのご都合にあわせて対応しています。だいたい30分ぐらいで、アーティストにも入ってもらい話し合いをしています。

会場　私は高齢者施設で音楽活動をしており、この活動を始めるにあたって福岡市近郊の高齢者施設300件ほどに営業活動を行いました。しかし、ほとんどがボランティア、無償での活動です。作業療法士の方から自分たちでもできる、と言われたり、音楽なら童謡や懐メロを流しておけばいい、と言われたりすることがあります。施設経営者は出費をできるだけ増やしたくない、外部の人を招いて謝金を払うようなことはしないで済ませたい、と考えているようです。そういうなかでどのように展開していくか考えているのですが、近隣住民、ご家族を招くなどして施設の広報につなげる、という視点で働きかけてはどうかと思っています。何か示唆がありましたらお願いします。

並河　御苦労はよくわかります。私たちも家族の方に来ていただくようにしたことも何度かあります。ご家族もなかなか来ていただけませんが、でも「家では見ない顔を見た」と言ってすごく喜ばれたこともありました。港区の施設で、家族の会という集まりを月に１度実施しているところがあり、その日にやってほしいと言われて造形のワークショップをご家族と一緒にやったことがあります。それぐらいでしょうか。ファイザープログラムでの１年間のまとめとしてシンポジウム「アートで介護」を鷲田清一氏の基調講演で開催しました。都内の公的機関から社会福祉協議会へ一斉メールでお知らせを出してもらったので福祉関係の方が100名くらい参加してくださいました。こんなにたくさんの方が来てくださったし、好評でしたから効果があったのでは？と期待したのですが、特になにもなかったですね（笑）。ですから、第二第三の上井草園の所長さんのような人をつかまえて実績をつくっていくこと、でしょうか。ひとつでもいいからモデルケースをつくって、そこから発信してもらうのもいいかもしれません。そう簡単には活動が広がらないので、私も落ち込むことがあります。助成金申請を続けて行くのは大変で、活動費を１回あたりいくらという形で施設が受け入れてくれるといいな、という気持ちもあったのですが、難しいようです。１NPOが報告書をつくって発信しても関心を示してくれる人は少ないから、大学などと組んで効果的に展開するとか、いい事例をつくって厚労省に働きかけるなどしなくてはいけないとの意見もあります。私は自分の興味から活動を始めて10年が経ちましたが、これからは確実に社会に根を下ろせることと活動の持続性を考える、小さな糸口でも見つけたいと思っているところです。福岡でのこのセミナーや、３月には国立新美術館のワークショップに関するセミナーでお話しする機会をいただいたのは幸運なことだと思っています。

会場　新井さんにお尋ねしたいです。対象人数は制限しておられますか？

新井　その方の状態にもよるのですが、人数だけでいえば20名から30名の間にしてくださいとお願いしています。10名以下だと少しさびしい感じになりますね。本当は15、６名～20名くらいがちょうどいいのかもしれません。お部屋の大きさにもよりますが。なぜ20～30名と申し上げるかというと、僕自身が直感的に全体を把握できるのがこの範囲だからです。参加者各々のお身体の調子やご機嫌を表情などから把握するためにはこのくらいが限界です。それより多くなるときはアシスタントの人数を増やすなどの対応をしています。

古賀　では前半はここまでとさせていただき、ここからは会場をつくりかえ、新井さんのワークショップに移らせていただきます。お三方に拍手をお送りください（拍手）。

「高齢者とアートのしあわせな出会いセミナー」新井英夫さんによるワークショップの記録

※ 28 人の参加者に新井さん、サポートとして板坂記代子さんが加わる。
※ワークショップ実施時間は約 50 分。

実施内容

ワークショップ開始前、参加者が輪になって椅子に座り始めると音の出るもの（おもちゃのような楽器）が複数配られる。隣に手渡し回していく。不思議な音で満たされる会場。

笛の演奏でワークショップスタート。手拍子に合わせて輪の中に新井さん登場。

太鼓を差しだし、叩いてもらう。手で・足で・頭で。何人かは新井さんが手を引いて輪の中央に誘い出し、一緒にポーズをとったり踊ったり。

太鼓の音を感じながら、立って歩く。空間をフルに使って自由に。
歩きながら、目があった人と握手。なるべくいろいろな人と。

肩と肩、ひじとひじ、足と足などを合わせて、挨拶。

新井さんの解説

こうやって冒頭で私が一人ひとりと向き合う時間をつくり個々の様子を見て動けそうか、踊れそうか、ハンディキャップがあるとしたらどんなか、を確認しています。

今日の参加者の皆さんは高齢者ではないので、皆さんに合わせてやっていきます。高齢者の方とやる場合は「ここが違うポイント、こんな感じ」、とお話しながら進めますね。ふだんはいちいち解説しませんが、今日はこういう機会なので特別解説つきで（笑）。

僕のワークショップのテーマのひとつは『ゆるやかなスキンシップに挑戦したい』。なかなか難しいけれど、スキンシップは心を開くもの。高齢者施設でも自然にやっていきたいと思っています。

ワークショップはバリアフリーなデザインが大切。なんらかの理由で手がうまく使えない人もいます。手が使えない場合は、身体のほかの部分でご挨拶。例えば肩と肩。

高齢者施設の場合、スタッフが参加してくれます。立って歩けず座っている方にはスタッフや歩ける人がやってきて挨拶をします。

全員イスに座り、クラゲになったつもりでフワフワ動いてみる。ストップ！の声で止まる。
足を隣の人とくっつける。高齢者の場合はスタッフが高齢者の足を持ち上げる感じで。そのままクラゲになってフワフワ、ストップ。
ぽよん、というクラゲの動きをウェーブで回す。
輪の中の誰かに、ランダムに動きを回す。

自分の動きに相手が反応してくれることがおもしろい。起こったことを受け容れてもらえるのがうれしいもの。
他者の反応がさらにその人の表現を引き出します。

2人組で『なべなべそこぬけ』。できるだけ男女で組んで。人で手をつないで輪になり『なべなべ』。1か所を全員がくぐってウラ返しになる→戻る。6人でも。一気に全員で。

これは2人とも「やる気がありすぎる」とできません（笑）。「力を抜く」ことが協力のポイント、どちらかが動きはじめたら身を任せたほうがいい。片方が車いすの場合、立っている人が動いてあげればくるっと回れます。

両方の手をつないでいるので、足腰が弱い方でもスタッフが適度に間に入れば大丈夫。

6人組でクラゲの「なべなべ」。フワフワした動き→太鼓の音で瞬間冷凍（ストップモーション）。ウラ返しになりながら。

みんなでガイコツダンス。ぶらぶらぶら…ストップ！

おもしろい形が出てきましたよ。何かの形を具体的に表現しようと思わなくても、力を抜いてフワフワゆらゆらして止めた瞬間にできる偶然の形を楽しみましょう。

ぶらぶら…のあと、新井さんの言う身体の部分を隣の人とくっつける。ひじとひじ・ひざとひざ・頭と頭／ひじとひざ・小指と小指・人差し指と人差し指…くっつけた指を離さないようにゆっくり動かしてみる。頭と頭をくっつけ、ゆっくり歩く。

相手と「くっつける」ことでちょっとした工夫やその方の個性がより表れてきます。ゆるやかなスキンシップで心の距離感を縮めたりする意味もあります。

さっきと違う人と２人組。イスに座って向き合う。鏡のように相手の動きを真似する。

小学校では立ってやりますが、高齢者は椅子に座ったままで。互いに真似ることは「投げかけ」と「受け容れ」、言葉によらない非言語の対話・コミュニケーションです。これが成り立つと何だかうれしいし、存在の肯定感や安心感にもつながります。思ってもみなかった動きが相手を「鏡」として引き出されます。高齢者の場合、ゆっくり、小さな動きから。お化粧するしぐさ、髪をとかす動作などからやってみてもいいかもしれません。今日は自由に動いてみましょう。

蝶と花の手のひらダンス。２人組で１人が蝶、もう１人が花。花が開いたらそこに蝶がひらひら飛んで来てにとまる。はじめは２人とも立ったままで向き合って。次は蝶の人が立って花の人は座って、「高齢者とスタッフ」を想定して。蝶は次々と花畑を巡っていろいろな花にとまる。

大きく動けなくても花の咲かせ方、蝶の飛び方とまり方に個性がじんわりとでます。これも「動き」によるコミュニケーションのダンスです。自分ひとりではモチベーションが低くても無理なく自然と相手との関係の中で、表現を引き出す工夫です。

最後に、元気な方の集まりで、また来週（来月）お会いしましょう、という場合にやること。空気で『元気の玉』をつくる。ゆっくり息をしながら玉を隣の人とくっつける。数人でくっつけあう。玉が壊れないように輪の真ん中に集めてくっつける。天井がないつもりで『元気の玉』を天に飛ばす、いち、にの、さん！

呼吸を整え心とからだを鎮めを落ち着く時間です。日常の流れに緩やかに戻っていただくために、ワークショップの締めくくりもとても大切な時間です。高齢者施設では、お一人おひとりと握手しながら私が感謝を込めて「ありがとうダンス」を踊る場合もあります。

ありがとうございました！

《ワークショップ後の質疑応答》

会場　やさしい音色の楽器を使われていますが、その理由は？

新井　今日は内容がやさしい感じだったからですが、もっと「リズミカルに元気に」することもあります。「アクセル」と「ブレーキ」のようなもので、「場を盛り上げる・賑やかにする」ものと「鎮める・落ち着く・集中を喚起する」ものの両極を用意しています。

会場　ワークショップの始まる前にみんなが輪になって座り始めた時、おもちゃのような「音の出るもの」をまずいくつも配られましたね。あれはどういう意図ですか？

新井　高齢者施設でワークショップをすると、時間通りに開始することができない場合もあります。お部屋から会場へ三々五々やってこられて、全員揃うのにどうしても時間がかかる。早く来た方もいるけれど、スタッフは次の人をお連れするために戻ってしまったりして、会話相手もなく場がさびしくなってしまう場合もあります。僕がずっとお相手することもできないので、会場にいる人同士でコミュニケーションをとってもらいたいんです。隣の人に渡すとき「いい音だね」と言ったり、会話のない方も音に反応したりすることがあるので、なごやかな空気の下地をつくるために簡単に音の出る楽器を回しています。紙風船で遊んだりすることもあります。

会場　耳が聞こえない高齢者もおられると思いますが、現場での説明はどのくらいなさるのですか？

新井　「これからこういうことをしますよ」と言葉での詳しい説明はあまり多くはしません。まずはやってみます。音も聞こえないかもしれないけど鳴らし続けます。でも直感的に場の雰囲気でやっている内容に入っていただけることが多いです。介護スタッフの方が間に入っている時は、その方からやることを耳元で伝えていただいたりします。耳の不自由な方、言葉の通じない方にはスタッフの方に極力そばについていただくようにお願いしています。

会場　実績を残すことが大切だけれども数値化することは難しいという話が前半にありましたが、こういうセッションがうまくいったかどうかをどう評価するのでしょう？

新井　僕の判断とコーディネーターの判断、施設の方の判断は違うかもしれませんね。僕自身が「うまくいったかどうか」の判断はその場の生の実感と事後の施設の方のフィードバックですね。「利用者さんのいつもと違う表情やふるまいが見えた」とか言われたらうれしいです。コーディネーターはどう評価するのでしょう？

古賀　熊本県立劇場の嶺さんはいかがですか？

嶺　高齢者施設に関しては、まだ始めたばかりですので実績を残したり評価するところまで至っていません。今年度の活動は、劇場が（一財）地域創造から助成金をもらい、施設からはお金をいただかずに実施していますので受入れてもらえている状況です。ですから、ある程度こちらの意向も入れられ打合せと振り返りは必ずさせていただいています。ARDAさんの資料を読ませていただいて、同じように施設職員の方のワークショップをまずやろうと思ったのですが、ダメでした。職員さんが集まらないというんですね。私たちはそういうつもりではありませんが、施設側ではレクリエーションという位置づけになっているんです。レクリエーションの間にベッドメイクなど別な作業をやらなければいけないので時間がとれないということです。そこがなかなかうまくいかないところで課題だと思っています。まだ、こちらとの認識がかけ離れているので実績というより、まずは取り組みを知ってもらい理解していただくために動いているところです。今はお試しのような形でやらせていただいていますが、助成金がとれなくなったら、アーティスト派遣のためのお金をどうつくるのか、難しい問題もあります。

会場　介護士の方にこのような活動のやり方を伝える、介護士ができるようにする、ということはないのですか？

新井　そもそも介護スタッフの方が、従来と違うアートと福祉を結びつけた新しい方法を学びたいという需要がどれくらいあるのか疑問ですが、要請があればお伝えしてもいいと思います。ただ、私がやっていることのほとんどはマニュアル化しにくいもので、簡単にお教えできないことも多いと思います。

古賀　アーティストだからできることもあると思います。だからこそ、私はアーティストに来てほしいんです。

新井　スタッフの方に事前のワークショップをするときは、「普段、使えることがあったらどうぞ」となるべくシェアするようにはしています。

古賀　何か結論が出るものではないのですが、今日、皆さんはたくさんのことを感じてくださったのではないかと思います。それを皆さんが関わられているフィールドで生かしていただき、冒頭、私がお話したような、みんなが最後までイキイキと生き抜くことができる社会をつくることにご一緒に取り組めたら幸いです。今日はどうもありがとうございました。

高齢者とアートのしあわせな出会いセミナー
参加者アンケートから

・（高齢者施設は）労働現場として厳しい職場だからこそ、スタッフにとって＆高齢者にとって創造活動のプロがアートを運んでくれる効果があるとわかった。行政、施設の理解が何より大切ですが、利用者さん一人ひとりの思い、ニーズも大切ですね。

・文化と福祉が同じ皿の上というのが現実になれば、もっと日本はステキな国になると思いました。私も 10 年、20 年ビジョンで始めようと思いました。

・劇場がこのような事業を実施しようとしていることや、その根拠があるというのを知れてよかった。

・助成金頼みで、ビジネスとして成立しなければ継続が難しいと思いました。何とかしていきたいですね！！

・介護施設のなかでなくても、町内の老人会等で一般の方がこのようなことをとり入れてもいいのでは？

・介護予防講座に取り入れる、という話は今後有効なのではないかと思いました。

・30、40 代のころ絵画制作をしていましたが、その感覚を生かしながら、しあわせな時間の提供者になれたら、と思いました。

・祖父が以前、特養にいたころ、工作・図画のようなことはしていました。それとアートをどのように分けて考えるのか？一緒でいいのか？施設職員が自立・自律して利用者が導いていけるのか、考えが深まりました。

・アートというのは誰でもできるし、やったら楽しいということがわかるワークショップでした。